

自然素材の持続可能な利用

この山あいの奥地で生き延びるには、村人たちは身近な自然素材を資源として活用し、再生可能かつ持続可能な方法で利用する必要があった。

この地域では米の栽培が難しかったため、不足していた稲わらの代わりに工芸や建築に使える植物が特に村人に重宝されていた。日本の山岳地帯に自生する低木であるマンサクがその一つである。若枝を切り取って捻じり、ネソと呼ばれる柔軟な結束材を作った。ネソは、合掌造りの屋根を形成するための多くの梁を束ねるのに使われ、他の地域で使われていた藁縄の使用を減らした。

もうひとつの重要な植物はカヤと呼ばれるススキで、屋根の葺き替えに使用された。カヤにはススキとカリヤスの2種類があります。後者は、茎が細く空洞であるため、茅をしっかりと束ねることができるので好まれた。茅葺き屋根の吸水量が少なく、雨や雪が降った後でもすぐに乾くため屋根が長持ちするからである。現在、カリヤス畑は成長の早いススキにほとんど取って代わられているため、屋根の葺き替えは以前よりも頻繁に行われるようになった。

伝統的に、カリヤス畑は庄川沿いの谷間の丘陵地にあり、各家が自分の畑を手入れしていた。収穫は雪が降る前の10月下旬から11月末まで続いた。地元の記録によれば、4人家族で1週間に約30束のカヤを刈り取り（1束とは、3.6メートルのロープで束ねることができる葦の数）、一家の屋根を葺き替えるのには約260束が必要だった。したがって、毎年の収穫は、雪が降り始めるまでに十分なカヤを集められるかどうかの戦いだった。

冬の暖房には、炎が熱くて燃えやすく、扱いやすいナラが好まれた。これは、薪と藁葺きの構造で非常に燃えやすい合掌造りの家屋に重要だった。また、ナラの木は比較的早く再生するため、安定した燃料供給が可能だった。

これらの天然素材は、再生可能性が重要な特徴であった。コピシングと呼ばれる方法で、薪にするために伐採された木は切り株を残し、すぐに新しい芽を出した。マンサクの枝（ネソ）もすぐに再生するように切られた。カリヤスの畑は、毎年健全に収穫ができるよう、また、ススキに浸食されないように注意深く管理されていた。白川郷の村人たちは、自然から得られる資源を持続的に利用することで、この荒涼とした隔絶された環境での生活様式を何世紀にもわたって維持することができたのである。